

# 大学図書館におけるピア・サポート制度のあり方の検討 —高知大学学生の図書館利用と学習に関するアンケート調査結果をふまえて—

■ 坂本 智香（高知大学学生総合支援センター）

キーワード： 大学図書館、ラーニング・コモンズ、ピア・サポート制度の課題、ピア・サポート制度のあり方

## 1 はじめに

近年、大学図書館のLC（ラーニング・コモンズ）は、国公私立大学の設置種別を超えて拡大しており、大学図書館の学生支援を特徴づける傾向になっている（実践事例普遍化小委員会 2015）。

高知大学学術情報基盤図書館<sup>1</sup>（以下「図書館」とする）においても、実践事例普遍化小委員会（2015）が提案するLCの目的「各大学の教育目的を実現するため、経営層や教育担当部署との認識共有及び連携を通じて、学習者中心の教育の不可欠な構成要素となることにより、主体的な学びを理解し、自立した学習活動を行う学生を養成すること」（p.25）をふまえ、同委員会が提案するLCの3要素（物理的リソース、アカデミックリソース、人的リソース）の観点からの図書館サービスの拡充に向けた事業が進行中である。

主な事業としては、A棟2Fの「アクティブラーニングフロア」の整備（物理的リソース）、『かんたんま

にゅある アカデミック・ライティングの基礎シリーズ』の発行（アカデミック・リソース）、情報検索指導、ICT利用サポート、レポート作成セミナーの開催（人的リソース）等が挙げられる。

しかしながら、図書館でのアカデミックリソースや人的リソースが充実していく中で、今後はライティング支援へのニーズの高まりが予想される中、図書館に常駐しライティング支援に対応できる教職員がおらず、人的リソース面での図書館サービスのさらなる拡充が課題となっている。

以上の課題をふまえ、人的リソースの拡充の一方策として、学生の自立的な学習の支援としてのピア・サポート制度のあり方を検討するための基礎資料として、高知大学学生による図書館利用と大学での学習の実態把握を目的とするアンケート調査「メディアの森（図書館）の利用と大学での学習に関するアンケート」を実施した。

本稿の構成は、以下のとおりである。まず、2節で調査の概要を述べる。3節・4節では集計結果の分析と考察を行い、5節ではその結果をふまえ、図書館で導入予定のピア・サポート制度のあり方について検討する。

<sup>1</sup>高知大学学術情報基盤図書館では、図書館サービスの他に、情報（コンピュータ・ネットワーク）関連サービスも提供されている。

## 2 調査の概要

アンケートの構成、対象者、実施期間、回収件数は表1のとおりである。

表1 アンケート調査の概要

(1) アンケートの構成	
I 図書館の利用状況 (平成29年10~11月について)	
(Q1:単数回答、Q2~Q5:複数回答)	
Q1. 利用頻度、Q2. 利用日、Q3. 利用時間帯、	
Q4. 利用目的、Q5. 利用エリア	
II 大学での学習に関して困った時の行動について	
(複数回答)	
Q6. 課題等に必要の情報(文献)の検索・収集	
Q7. 個人のPC・プリンター使用	
Q8. 授業内容の理解	
Q9. 授業課題(プレゼンテーション、レポート等)	
Q10. 卒業論文	
III 自主学習を行う場所について(複数回答)	
Q11. 授業課題や試験がないとき	
Q12. 授業課題の締切日や試験日が近づいてきたとき	
IV 図書館に対するご意見・ご要望(自由記述回答)	
(2) 対象者	
アンケート期間中にメディアの森(図書館)を利用した高知大学の学部生・大学院生(留学生を含む)	
(3) 実施期間	
平成29年12月1日(金)~平成30年1月31日(水)	
(4) 回収件数	
学部生294件、大学院生7件、所属不明1件	

本稿で述べる分析・考察の内容は、学部生(N=294)に焦点を当て、I・IIに絞り、それぞれの有効回答(複数回答の内部に矛盾を含むものや、回答すべきところが回答されていないものを取り除いたもの)を抽出して分析・考察した結果である。

Iの有効回答数は278件、IIは244件であった。所属キャンパスについては、I・IIともに回答者の約90%が図書館の所在地であるAキャンパスの学生であった(図1)。また、年次別の有効回答数については、I・

IIともに3年次生の有効回答数が最も多く約30%、次いで1・2年次生が多く25%前後、4年次生以上が最も少なくIでは約17%、IIでは約20%であった(図2)。

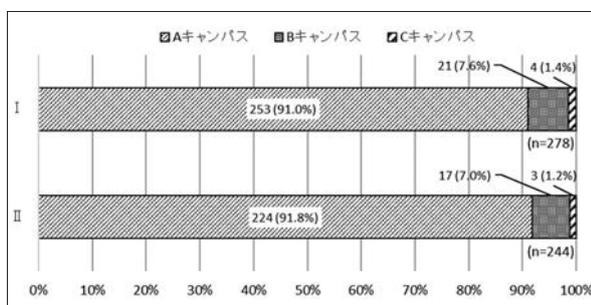


図1 I・IIの有効回答数(キャンパス別)

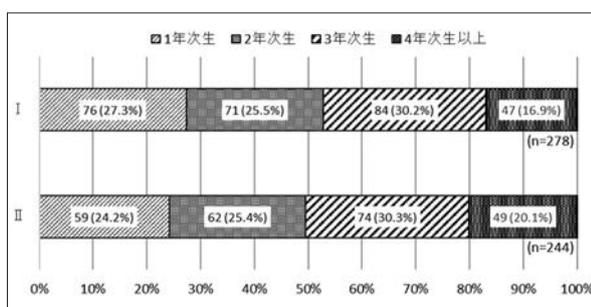


図2 I・IIの有効回答数(学年別)

## 3 図書館の利用状況

### 3.1 利用頻度

年次別の利用頻度を集計した結果が図3である。図3から、すべての年次で「2~3日に1回」が40%前後と最も多く、次いで「1週間に1回」が多いことがわかる。

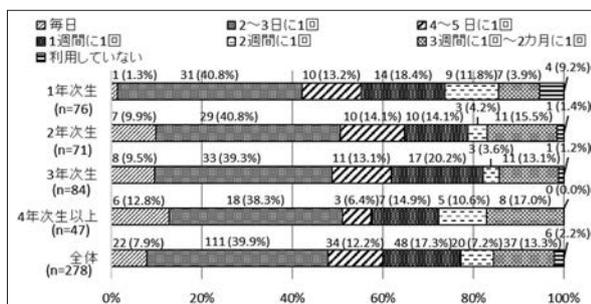


図3 利用頻度

### 3.2 利用日

年次別の利用日(曜日)を集計した結果が図4、利用者の比率順に整理したものが表2である。表2から、1・2年次生は1位・2位に月曜日と火曜日かと

にも含まれるのに対し、3・4年次生以上では1位・2位に火曜日と水曜日がともに含まれており、年次ごとに学生が利用しやすい曜日には違いがある可能性が示唆された。

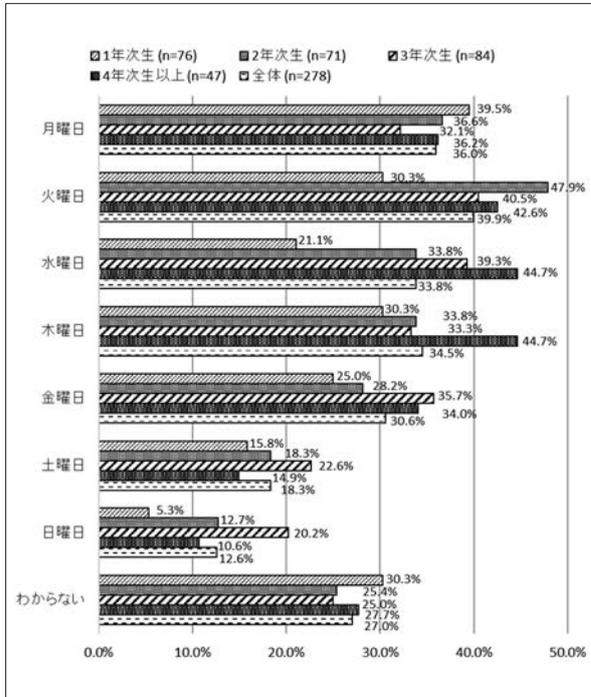


図4 利用日

表2 利用日(比率順)

区分	1位		2位		3位	
	曜日	比率	曜日	比率	曜日	比率
全体 (n=278)	火	39.9%	月	36.0%	木	34.5%
1年次生 (n=76)	月	39.5%	火・木	30.3%	金	25.0%
2年次生 (n=71)	火	47.9%	月	36.6%	水・木	33.8%
3年次生 (n=84)	火	40.5%	水	39.3%	金	35.7%
4年次生以上 (n=47)	水・木	44.7%	火	42.6%	月	36.2%

### 3.3 利用時間帯

年次別の利用時間帯を集計した結果が図5、利用者の比率順に整理したものが表3である。

表3の1位・2位の時間帯に注目すると、2・3・4年次生以上では順位の違いはあるものの、いずれも13:00~15:00と15:00~18:00であるのに対し、1年次生では1位が15:00~18:00、2位が12:00~13:00という結果であった。

12:00~13:00が3位以上であったのは1年次生の

みであったことから、1年次生は他の年次生とは異なるスケジュールで行動している可能性が示唆されたとと言える。

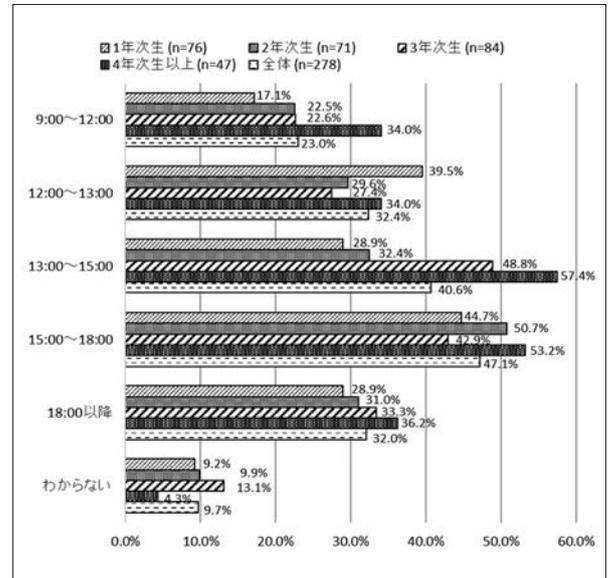


図5 利用時間帯

表3 利用時間帯(比率順)

区分	1位		2位		3位	
	時間帯	比率	時間帯	比率	時間帯	比率
全体 (n=278)	15:00~18:00	47.1%	13:00~15:00	40.6%	12:00~13:00	32.4%
1年次生 (n=76)	15:00~18:00	44.7%	12:00~13:00	39.5%	13:00~15:00	28.9%
2年次生 (n=71)	15:00~18:00	50.7%	13:00~15:00	32.4%	18:00以降	31.0%
3年次生 (n=84)	13:00~15:00	48.8%	15:00~18:00	42.9%	18:00以降	33.3%
4年次生以上 (n=47)	13:00~15:00	57.4%	15:00~18:00	53.2%	18:00以降	36.2%

### 3.4 利用エリア

図書館のエリア別に利用者の比率を集計したものが図6、比率順に整理したものが表4(表4~表10は本稿末に一括して掲載)である。

表4の中で、まず「3~5F閲覧室」利用者の比率に注目すると、1・2・3年次生では「3・4・5F閲覧室」のすべてが1~5位のいずれかに含まれる結果であった。それに対し、4年次生以上で5位以内に入ったのは「4F閲覧室」のみであり、「5F閲覧室」は6位(21.3%)、「3F閲覧室」は7位(19.1%)という結果であった。

次に、「2Fアクティブラーニングフロア」利用者の比率については、3・4年次生以上で1位、2年次生で2位であったのに対し、1年次生では4位であった。

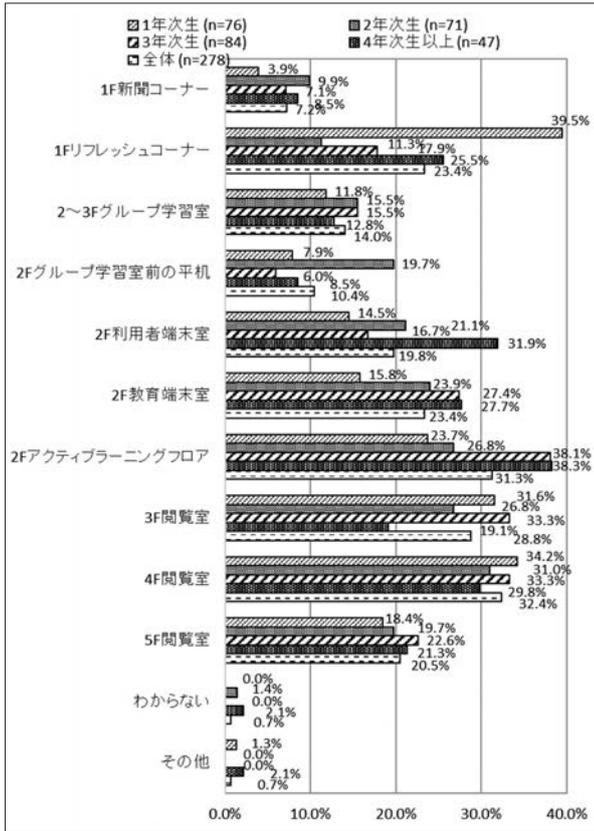


図6 利用エリア

さらに、「2F教育端末室」については、2・3年次生で3位、4年次生以上で4位であったのに対し、1年次生では6位（15.8%）という結果であった。

最後に、「1Fリフレッシュコーナー」については、1年次生で1位であったのに対し、3・4年次生以上では5位、2年次生では7位（11.3%）であり、1年次生とその他の年次生の間で非常に対照的な結果であった。

この結果は、「3～4F閲覧室」・「2Fアクティブラーニングフロア」・「2F教育端末室」・「1Fリフレッシュコーナー」の利用に関して、利用者の年次に応じた棲み分けが生じている可能性を示唆していると思われる。

特に1年次生は、他の年次生に比べ、「2Fアクティブラーニングフロア」・「2F教育端末室」利用者の比率が相対的に低い一方で、「1Fリフレッシュコーナー」利用者の比率は相対的に高くなっている可能性が示唆されたとと言える。

### 3.5 利用目的

年次別の利用目的の比率を集計したものが図7、比率順に整理したものが表5である。

表5からわかるように、すべての年次で「1人での学習」が1位である一方で、「空き時間の居場所として」・「図書館資料の利用」・「ICTの利用」に関しては、年次間で違いが見られた。

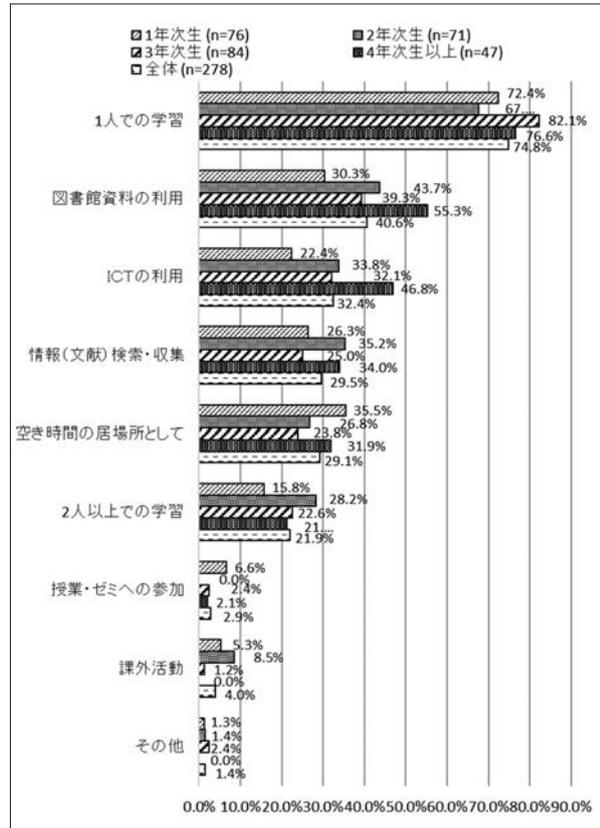


図7 利用目的

まず「空き時間の居場所として」については、1年次生で2位であったのに対し、3・4年次生では5位、2年次生に関しては6位（26.8%）という結果であった。

次に、「図書館資料の利用」については、2・3・4年次生が2位であったのに対し、1年次生では3位という結果であった。

そして、「ICTの利用」は、3・4年次生で3位であったのに対し、2年次生が4位、1年次生が5位であった。ただし、1年次生と2年次生の利用者の比率を比較すると、2年次生では4位であるものの33.8%と、3年次生の32.1%を上回る結果であった。それに

対し、1年次生の比率は22.4%と、2・3・4年次生以上の比率に比べ低い結果であった。

以上の結果は、図書館の利用目的に関しては、1年次生と2年次生以上の間で違いがあり、1年次生に関しては図書館に「居場所」としての機能を求める学生が2・3・4年次生以上と比べて相対的に多い可能性を示唆している。

このことはまた、3.4で見たように、1年次生の利用者の比率が最も高いエリアが「1Fリフレッシュコーナー」であることも関係が深いのではないだろうか。

つまり、このエリアが1年次生にとって、「1人での学習」や「空き時間の居場所として」といった多目的で利用できる（あるいは、利用しやすい）場所になっている可能性が示唆されたのではないと思われる。

### 3.6 まとめ

以上の結果は、全年次で「1人での学習」を目的とする図書館利用者の比率が最も高いことと並行して、利用日、利用時間帯、利用エリア、利用目的に関しては、それぞれの年次に特徴的な傾向も存在する可能性を示唆していると考えられる。

## 4 支援リソースの利用状況—大学の学習に関して困った場合—

### 4.1 情報（文献）の検索・収集

「情報（文献）の検索・収集」に関して困った際の行動を年次別に集計した結果をまとめたものが図8、回答者の比率順に整理したもの（「困った経験がない」を除く）が表6である。

表6を見ると、1年次生の5位を除いて、「関係資料（インターネット上）」・「関係資料（インターネット外）」・「友人・知人（学内）」・「教員（授業担当者等）」・「職員（図書館内）」が1位～5位（または4位）を占めていることがわかる。

上述の5つの支援リソースのうち、「関係資料（インターネット上）」は全年次で1位であり、回答者の比率も3年次生の54.1%を除き70%台という高い比率であった。

次に、「関係資料（インターネット外）」は1年次生が2位で39.0%、2年次生が3位で43.5%、3・4年次生以上が4位でそれぞれ29.7%、40.8%であった。

また「友人・知人（学内）」については、1年次生が3位で37.3%、2・3年次生が2位でそれぞれ45.2%、52.7%、4年次生以上が3位で42.9%であった。

以上の3つの支援リソースは、回答者の比率が最も低いものでも3年次生4位「関係資料（インターネット外）」の29.7%と、すべて相対的に高い比率であった。

残る2つの支援リソースの中で、まず「教員（授業担当者等）」は3・4年次生以上がそれぞれ33.8%、46.9%と高い比率であったのに対し、1・2年次生ではともに10%台と、相対的に低い比率であった。

また、「職員（図書館内）」については、3・4年次生が10%台、2年次生が6.5%、1年次生が3.4%（図8）と、全体的に低い比率であった。

この結果は、情報（文献）の検索・収集に関して困った際、全年次で「関係資料（インターネット上）」が

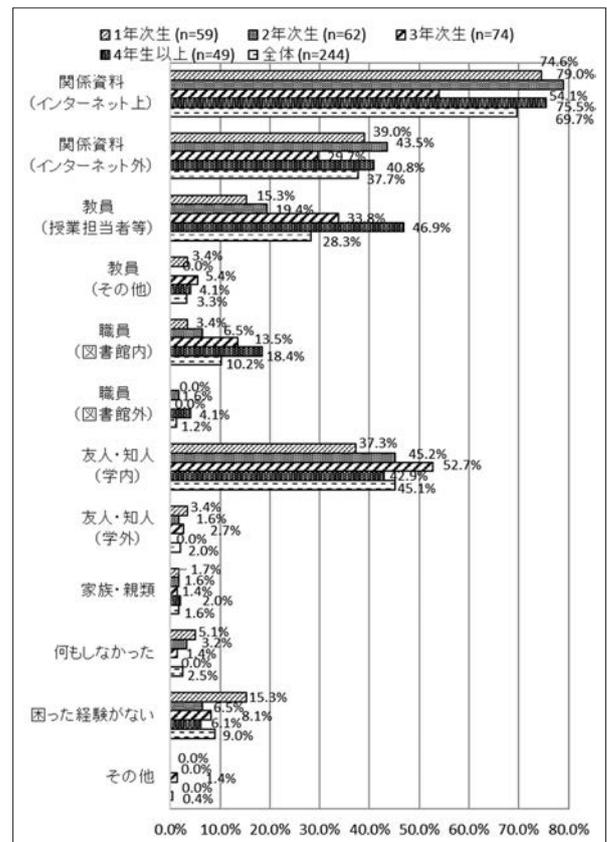


図8 情報（文献）の検索・収集における支援リソースの利用状況

なり高い比率の学生によって利用されているのと並行して、「友人・知人(学内)」・「関係資料(インターネット外)」に関しても一定の比率以上の学生により利用されている可能性を示している。

そして、その一方で、「教員(授業担当者等)」に関しては、相対的に上級年次は高い比率の学生が利用しているのに対し、下級年次ではあまり利用されていないこと、「職員(図書館内)」は、全年次の学生にあまり利用されていない可能性が示唆されたと言える。

#### 4.2 個人のPC・プリンター使用

「個人のPC・プリンター使用」に関して困った際の行動を年次別に集計した結果をまとめたものが図9、回答者の比率順に整理したもの(「困った経験がない」を除く)が表7である。

まず、表7に示したように、すべての年次で1位は「友人・知人(学内)」であり、1年次生が25.4%、2年次生が40.3%、3年次生が33.8%、4年次生以上が

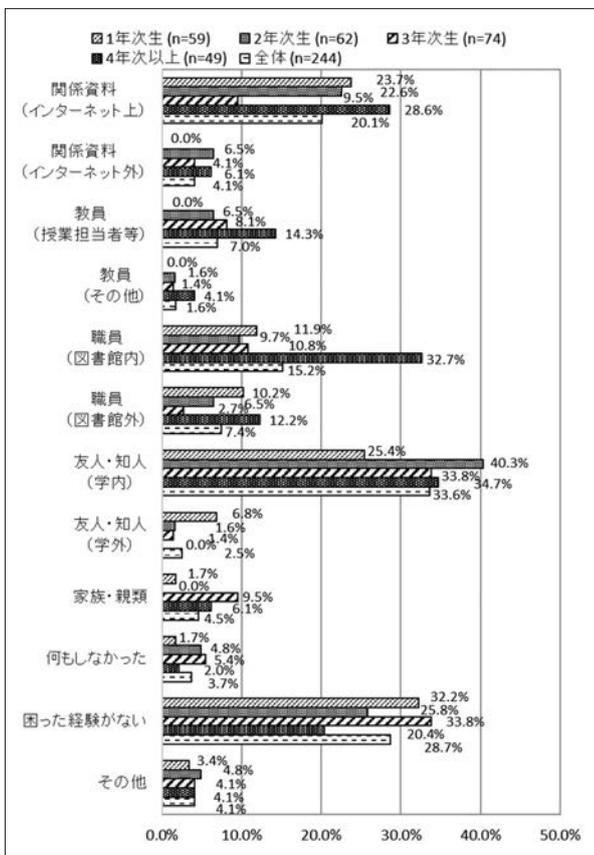


図9 個人のPC・プリンター使用における支援ソースの利用状況

34.7%であった。4.1の「情報(文献)の検索・収集」の場合に比べると低い比率であるが、これは、全年次で20%以上の学生が「困った経験がない」と回答したことが影響していると考えられる(図9)。

次に、「関係資料(インターネット上)」に注目すると、1・2年次生がともに2位でそれぞれ23.7%、22.6%、4年次生以上では3位で28.6%と、相対的に高い比率であった。

これらに対し、表7では「職員(図書館内)」も全年次で2位または3位と上位ではあったものの、1年次生が11.9%、2年次生が9.7%、3年次生が10.8%と、相対的に低い比率であった。

この結果は、学生が個人のPC・プリンターの使用に関して困ることは他のケースに比べ少ないものの、実際に困った際には、「職員(図書館内)」よりも、「友人・知人(学内)」・「関係資料(インターネット上)」を利用し解決しようとする学生が相対的に多い可能性を示唆していると思われる。

#### 4.3 授業内容の理解

「授業内容の理解」に関して困った際の行動を年次別に集計した結果をまとめたものが図10、回答者の比率順に整理したもの(「困った経験がない」を除く)が表8である。

表8から、全年次で1位~4位までを「友人・知人(学内)」・「関係資料(インターネット上)」・「関係資料(インターネット外)」・「教員(授業担当者等)」が占める結果であったことがわかる。

まず「友人・知人(学内)」については、全年次で1位となっており、いずれの年次の回答者の比率も50%台~60%台と高い結果であった。

次に「関係資料(インターネット上)」については、1・2・4年次生以上が2位で、それぞれ45.8%、46.8%、53.1%であった。また、3年次生においても3位で33.8%と、相対的に高い比率であった。

「教員(授業担当者等)」については、1・2・4年次生以上が3位でそれぞれ28.8%、32.3%、40.8%、3年次生が2位で40.5%であった。

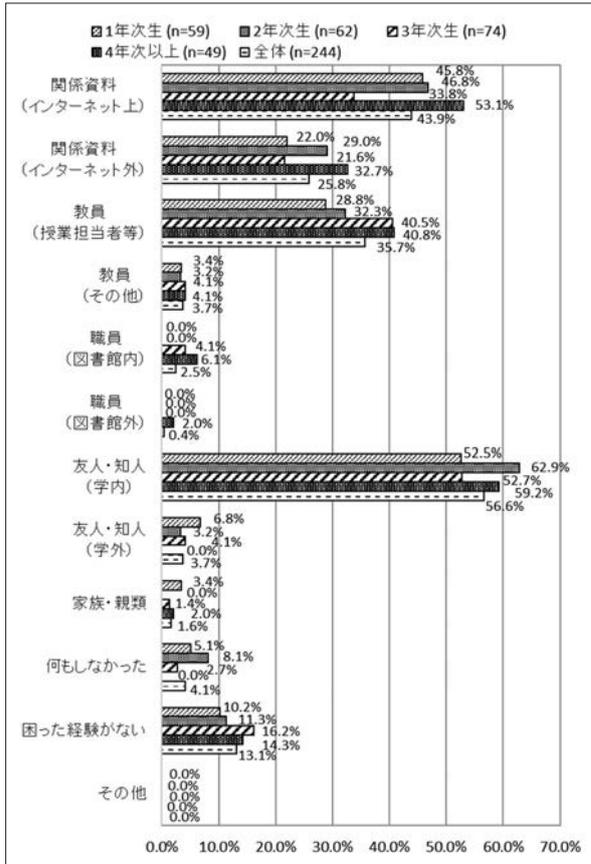


図10 授業内容の理解における支援リソースの利用状況

そして、「関係資料（インターネット外）」については、全年次が4位で1年次生22.0%、2年次生29.0%、3年次生21.6%、4年次生以上32.7%であった。

ここまで4つの支援リソースについて見てきたが、「教員（授業担当者等）」に注目すると、上級年次ほど回答者の比率が高く、下級年次ほど低くなっていることがわかる。

このことは、「授業内容の理解」に関して学生が困った際には、全年次において「友人・知人（学内）」・「関係資料（インターネット上）」・「関係資料（インターネット外）」が多く利用されている一方で、「教員（授業担当者等）」も相対的に多くの学生に利用されているものの、下級年次では上級年次に比べ利用されにくい状況である可能性が示唆されたと思われる。

#### 4.4 授業課題（プレゼンテーション・レポート等）

「授業課題（プレゼンテーション・レポート等）」に関して困った際の行動を年次別に集計した結果をまと

めたものが図11、回答者の比率順に整理したものの（「困った経験がない」を除く）が表9である。

ここでは、4.3の「授業内容の理解」の時と同様、全年次で1位～4位を「友人・知人（学内）」・「関係資料（インターネット上）」・「関係資料（インターネット外）」・「教員（授業担当者等）」が占める結果であった（表9）。

まず「友人・知人（学内）」が全年次で1位であり、いずれも50%台～60%台の高い比率であった。

「関係資料（インターネット上）」も同様に、全年次で2位であり、いずれの年次も30%台～40%台の高い比率であった。

次に、「関係資料（インターネット外）」・「教員（授業担当者等）」に注目すると、全年次で3位または4位という結果であった。しかし、4年次生以上の「関係資料（インターネット外）」が30.6%、「教員（授業担当者等）」が42.9%と相対的に高い比率であったのに対し、3年次生ではそれぞれ12.2%、25.7%、2年次

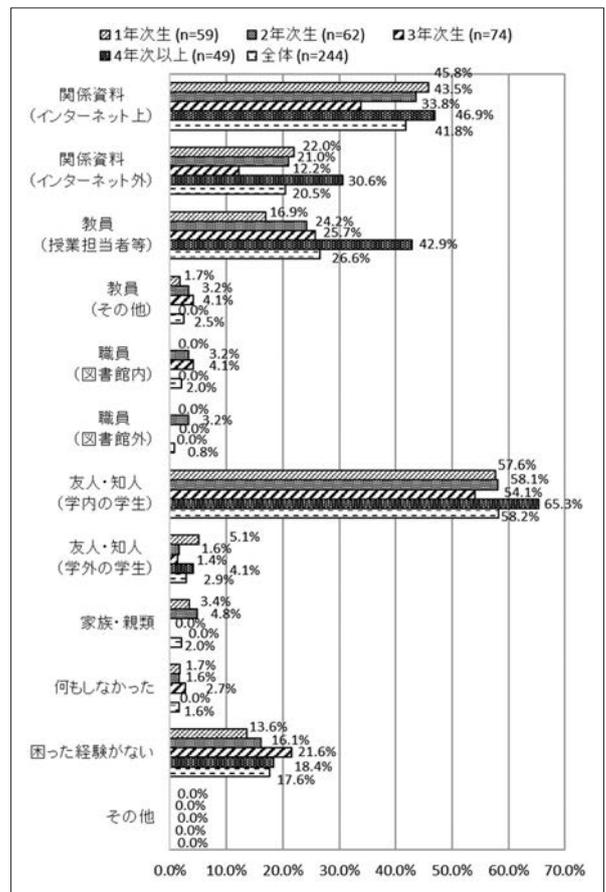


図11 授業課題における支援リソースの利用状況

生では21.0%、24.2%、1年次生では22.0%、16.9%と、相対的に低い比率であった。

以上のことは、「授業課題（プレゼンテーション・レポート等）」に関して困った際、全年次の学生により「友人・知人（学内）」・「関係資料（インターネット上）」が多く利用されている一方で、「関係資料（インターネット外）」・「教員（授業担当者等）」については、4年次生以上では相対的に多くの学生に利用されているのに対し、3年次生以下の学生にはあまり利用されていない可能性を示唆していると思われる。

#### 4.5 卒業論文

ここでは、1年次生の89.8%、2年次生の75.8%、3年次生の59.5%が「困った経験がない」と回答したことをふまえ、4年次生に限定して結果を述べる。

回答者の比率を集計しまとめたものが図12、比率順に整理したもの（「困った経験がない」を除く）が表10である。

表10では、1位が「教員（授業担当者等）」で83.7%、

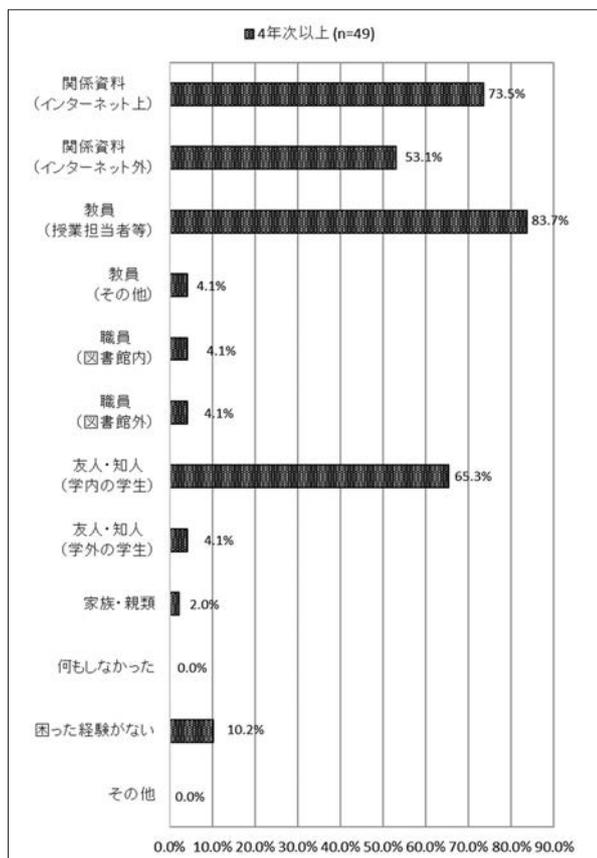


図12 卒業論文における支援リソースの利用状況

2位が「関係資料（インターネット上）」で73.5%、3位が「友人・知人（学内）」で65.3%、4位が「関係資料（インターネット外）」で53.1%と、これらの支援リソースが卒業論文作成の過程で高い比率で利用されている可能性が示唆された。

#### 4.6 まとめ

以上の結果から、まず「情報（文献）の検索・収集」・「個人のPC・プリンター利用」・「授業内容の理解」・「授業課題（プレゼンテーション・レポート等）」について学生が困った際には、相対的に高い比率の学生により「友人・知人（学内）」・「関係資料（インターネット上）」が利用されているのに対し、「教員（授業担当者等）」・「職員（図書館内）」を利用する学生の比率は相対的に低い可能性が示された。

中でも「教員（授業担当者等）」については、下級年次になるほど利用されていないこと、「職員（図書館内）」はほぼ全ての年次であまり利用されていない可能性が示されたことは、これらの支援リソースとしてのアクセシビリティを高めることの必要性を示唆していると思われる。

最後に、「卒業論文」については、4年次生以上に限定した結果ではあるが、「友人・知人（学内）」・「関係資料（インターネット上）」に加えて、上述の4つのケースと異なり、「教員（授業担当者等）」が非常に多くの学生により利用されている可能性が示唆された。

### 5 考察

#### 5.1 ピア・サポート制度の課題

本稿の冒頭で述べたように、実践事例普遍化小委員会（2015）では、LCの目的について「各大学の教育目的を実現するため、経営層や教育担当部署との認識共有及び連携を通じて、学習者中心の教育の不可欠な構成要素となることにより、主体的な学びを理解し、自立した学習活動を行う学生を養成すること」（p.25）という提案がなされており、高知大学でも図書館での「自立的な学習のサポート」の充実としてピア・サポート制度の導入を検討中である。

確かに、3.5の利用目的の分析において「1人での学習」の回答者比率が最も高かったことをふまえると、「自立的な学習のサポート」の充実を目的とするピア・サポート制度の導入は妥当ではないと思われる。

しかしながら、4節の分析により、「情報（文献）の検索・収集」・「個人のPC・プリンター利用」・「授業内容の理解」・「授業課題（プレゼンテーション・レポート等）」に関して学生が困った際、「友人・知人（学内）」や「関係資料（インターネット上）」を利用する比率が高く、「教員（授業担当者等）」は下級年次の学生ほどあまり利用されていないこと、「職員（図書館内）」はほぼ全ての年次の学生によりあまり利用されていない可能性が示唆された。

この結果は、学生が大学での学習で困った場合に、専門的な知識・経験を有する支援リソースをあまり利用することなく、仲間内や個人の判断だけに基づき問題を解決する傾向があることを示唆している。<sup>2</sup>

この状況は、実際にピア・サポート制度の運用を開始しても、相談に訪れる学生の数がそう多くは見込めないことを意味している。

ピア・サポート制度を利用する学生が少なく、広報活動に力を入れ改善する試みは、村尾他（2014）等でも報告されている。

しかし、その一方で、ピア・サポート制度を利用する学生が少ないことを、運用者側がどのように解釈し運用に活かすかという点に関しては、望ましい状況として捉える立場や、ピア・サポート制度とは独立した問題とする見方もある。

例えば、細川（2007：p.91）では、1年次生によるピア・サポーターへの相談が少ないことを課題として指摘した上で、「1年生にとって学習上の課題がそれほどなく、スムーズに大学生活を送っているのであれ

ば、相談者が少ないことはむしろ歓迎すべきことである」と述べられている。

また、吉田他（2014：p.35）のように、ピア・サポーターに相談したことがない学生544名中、31.3%の学生が「質問したいことがない」と回答したことに対して、「これはSSS（筆者注：大学図書館で行われているピア・サポート活動の名称）の課題ではない」という考え方が示されている。

しかしながら、学生支援に関する研究（松塚2009）においては、こうしたアンケート調査に回答する学生に関して「どの学生支援についても、利用する学生、しない学生ともに、必要であると感じている」（p.63）とした上で、「学生が自ら認識している悩みではなく、悩みの内在的指標を見た場合、危険度の低い学生は支援が必要であると認識している一方、危険度の高い学生は支援の必要性を感じていない傾向にある」（p.68）と述べ、「悩みのサインを送ってはいないが、それに対処する支援を活用しようとの意識に達しない学生がいる」（p.68）ことが示唆されると述べている。

つまり、ピア・サポート制度の観点から言い換えると、制度を活用し学習に関して相談する学生が少ない背景や、アンケート調査等における「質問したいことがない」といった回答の背景は複雑であり、大学での学習上の課題が少ないケースや、仲間内・個人の判断で解決できているという、良いケースだけでは決まないと考えられるのである。<sup>3</sup>

また、4節で見たような、「友人・知人（学内）」や「関係資料（インターネット上）」を利用して学習上の困りごとを解決しようとしている学生が、果たして、仲間内や個人の判断によって本当に適切な解決方法を見出すことができているのかも、疑問である。

## 5.2 ピア・サポート制度のあり方

5.1で指摘した課題をふまえ、ピア・サポート制度は今後、その妥当なあり方として、「自立的な学習のサ

<sup>2</sup> 大学での学習に困った学生が先輩や友人といった身近な学生を頼ろうとする傾向は、細川（2007）及び濱田・細川（2014）でも報告されている。さらに、この傾向と、学生にとって研究室に教員を訪ねることは敷居が高いことをふまえ、「学生が高校から大学への移行において様々な課題を抱えながらも、学習意欲を失わずに継続的に学ぶためには、学生個々の努力もさることながら、学ぶ場としてのコミュニティ形成が重要であると考えられる」（濱田・細川2014：p.3）と述べられている。

<sup>3</sup> 細川（2007：p.91）でも「しかし、相談したいことがあるのに、ピアサポートルーム（筆者注：ピア・サポート活動の名称）を訪れることができていないのであれば、その要因を検証する必要がある」と述べられている。

ポート」の中でどのような機能を担う必要があるのだろうか。

課題の性質をふまえると、ピア・サポーターには、学習上の問題に対する解決策を提示するのではなく、(1)「友人・知人(学内)」や「関係資料(インターネット上)」を利用しても問題が解決しなかった場合に、自らの問題解決方法を検証し自発的に改善することを促す機能や、(2)支援リソースとしての「教員(授業担当者等)」・「職員(図書館内)」を(特に下級年次の)学生により積極的に利用してもらう上で必要な準備(問題点の分析等)をサポートする機能を担うことが求められるのではないと思われる。<sup>4</sup>

(1)については、学生が本当に「友人・知人(学内)」・「関係資料(インターネット上)」を利用して学習上の問題を適切に解決することができているか否か、客観的に検証してもらう機会として必要であると思われる。

次に、(2)については、例えば情報(文献)の検索・収集に関する困りごとであれば、検索の手がかりとなるキーワード、利用可能な情報リソース、検索テクニック等の知識はもちろんのこと、情報や文献を何のために検索・収集し、どのように用いるのか(あるテーマについて概要を把握するのか、課題を見つけるのか、主張の根拠を探すのか等)を、学生自身が十分に理解した上で取り組めるよう、学生の自立的な思考をサポートする必要があると思われる。

また、個人のPC・プリンター利用に関する困りごとと同様に、「友人・知人(学内)」や「関係資料(インターネット上)」を利用しても問題が解決しない場合には、早急に図書館の提供する情報関連サービス(ノートパソコンの設定、ノートパソコンのネットワーク接続等の情報教育支援)の利用へとつなげる必要がある。

そして、授業内容の理解や課題(プレゼンテーション、レポート等)に関しては、授業や自主学習の過程を利用者と共に振り返り、理解が困難になった状況や、テキスト・配布資料・参考書等で理解が困難な箇所の特定、教員への質問内容、理解を補うために自主的に学習するとよいこと等について、学生の意思を尊重しながら共に検討すること等が考えられる。

最後に、4年次生以上の「卒業論文」に関する問題に対しては、問題解決のための行動としての「教員(授業担当者)」の利用のあり方を客観的に検証・改善するサポートを行うことが考えられる。具体的には、相談に訪れた学生と思考過程や執筆過程を振り返り、問題の在りかや、指導教員に確認・質問すると良いこと等を客観的に検討し、学生が主体的に問題に気付き、改善・修正するサポートを行うことが必要なのではないかと思われる。

## 6 おわりに

本稿では、平成29年12月1日から1月31日にかけて実施したアンケート調査「メディアの森(図書館)の利用と大学での学習に関するアンケート」の分析・考察をふまえ、本学図書館での導入を検討中のピア・サポート制度のあり方について検討を行った。

その結果、まず図書館利用の目的について「1人での学習」と回答した学生の比率が最も高かった一方で、他の利用目的や、利用日、利用時間帯、利用エリアの面では年次に特徴的な傾向がある可能性が示唆された。

また、大学での学習に関して困った場合の支援リソースの利用状況から、「友人・知人(学内)」・「関係資料(インターネット上)」を利用すると回答した学生の比率が高い一方で、「教員(授業担当者等)」を利用するという回答は下級年次になるほど低く、「職員(図書館内)」についてはほぼ全ての年次で回答者の比率が低いことが明らかとなった。

以上をふまえ、今後のピア・サポート制度に求められる役割について先行研究をふまえて検討し、自らの学習上の問題への取組方を他者の視点も交えて客観的

<sup>4</sup> 吉田他(2014)でも、アドバイザーを務める教員11名と大学院生2名へのアンケート調査結果をふまえ、改善点として「質問された内容に対して、その解答を教える場所ではないことや、相談者に考えさせることも要求することなどをアドバイザー間で確認し対応していくことが求められる」(p.32)、「どんな質問であっても答えを教えてくれる場ではないことを、学生にも理解してもらう必要はある」(p.35)と述べられている。

に検証し、問題点に気づき、自ら改善・修正していくサポートの必要性を指摘した。<sup>5</sup>

しかしながら、本稿で述べた分析・考察は、あくまでアンケート実施期間中に図書館を利用した学生の回答結果に基づくものである。そのため、図書館を利用する学生と利用しない学生の学習の状況、ピア・サポート制度へのニーズの共通点・相違点等について、まだ不明な点が多く残されていることは明らかである。これらは、今後の課題としたい。

## 付記

本稿の内容は、平成29年度教育研究活性化事業（教育改善・修学支援）「アクティブラーニングフロア活性化にむけての方策（図書館におけるラーニング・コモングの拡充とピア・サポーター制度導入にむけてのニーズ調査）」による成果の一部である。

## 参考文献

佐渡島紗織・太田裕子（2013）『文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房。

実践事例普遍化小委員会（2015）「5 ラーニング・コモング(LC)の在り方(共通理解のために)」『ラーニング・コモングの在り方に関する提言 実践事例普遍化小委員会報告』, pp.24-31, <https://www.janul.jp/j/projects/sftl/sftl201503a.pdf>, 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会, (参照:2017年5月1日)。

濱田陽・細川和仁（2014）「学習ピアサポートシステムの軌跡」『秋田大学教養基礎教育研究年報』16, pp.1-7, [https://air.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=2446&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://air.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2446&item_no=1&page_id=13&block_id=21), (参照:2018年9月6日)。

細川和仁（2007）「学習ピアサポート・システム」の取

り組みについて」『第57回東北・北海道地区大学一般教育研究会研究集録—「教養教育の新たな展開—教育の質保証と学習支援」—』pp.88-91,

<https://www.high.hokudai.ac.jp/center/inform/ipank57.pdf>, 東北・北海道地区大学一般教育研究会, (参照:2018年9月4日)。

松塚ゆかり（2009）「なぜ、教育と生活支援の連携強化が求められるのか: 支援ニーズの実証分析から」『大学教育研究開発センター年報』2008, pp.57-72, <https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/17424/1/rdche200800570.pdf>,

(参照:2018年9月4日)。

村尾真由子・松原悠・洪昇基・佐藤良太・秋山茉莉花・金瑜眞・嶋田晋・金井雅仁・浜島佑斗（2014）「筑波大学附属図書館ラーニング・アドバイザーの活動」『大学図書館研究』101, pp.108-118, 大学図書館研究編集委員会。

吉田博・佐々木奈三江・亀岡由佳・枝川恵理・斉藤くるみ（2014）「大学図書館で実施する学習支援の成果と課題—Study Support Space の実践から—」『大学教育研究ジャーナル』第11号, pp.26-37,

<https://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/ja/106326>, (参照:2018年9月6日)。

<sup>5</sup> 同様の理念に基づくピア・サポート活動としてのライティング支援の取組として、早稲田大学ライティング・センターでの実践事例（佐渡島・太田2013）が挙げられる。

表4 利用エリア(比率順)

区分	1位		2位		3位		4位		5位	
	利用エリア	比率	利用エリア	比率	利用エリア	比率	利用エリア	比率	利用エリア	比率
全体 (n=278)	4F閲覧室	32.4%	2Fアクティブ ラーニングフロア	31.3%	3F閲覧室	28.8%	1Fリフレッシュ コーナー	23.4%	5F閲覧室	20.5%
1年次生 (n=76)	1Fリフレッシュ コーナー	39.5%	4F閲覧室	34.2%	3F閲覧室	31.6%	2F教育端末室 ラーニングフロア	23.7%	5F閲覧室	18.4%
2年次生 (n=71)	4F閲覧室	31.0%	3F閲覧室	26.8%	2F教育端末室	23.9%	2F利用者端末室	21.1%	2Fグループ 学習室前の平机 5F閲覧室	19.7%
3年次生 (n=80)	2Fアクティブ ラーニングフロア	38.1%	3F閲覧室	33.3%	2F教育端末室	27.4%	5F閲覧室	22.6%	1Fリフレッシュ コーナー	17.9%
4年次生以上 (n=47)	2Fアクティブ ラーニングフロア	38.3%	2F利用者端末室	31.9%	4F閲覧室	29.8%	2F教育端末室	27.7%	1Fリフレッシュ コーナー	25.5%

表5 利用目的(比率順)

区分	1位		2位		3位		4位		5位	
	利用目的	比率	利用目的	比率	利用目的	比率	利用目的	比率	利用目的	比率
全体 (n=278)	1人での学習	74.8%	図書館資料の 利用	40.6%	ICTの利用	32.4%	情報(文献) 検索・収集	28.5%	空き時間の 居場所として	29.1%
1年次生 (n=76)	1人での学習	72.4%	空き時間の 居場所として	35.5%	図書館資料の 利用	30.3%	情報(文献) 検索・収集	26.3%	ICTの利用	22.4%
2年次生 (n=71)	1人での学習	67.6%	図書館資料の 利用	43.7%	情報(文献) 検索・収集	35.2%	ICTの利用	33.8%	2人以上での 学習	28.2%
3年次生 (n=84)	1人での学習	82.1%	図書館資料の 利用	39.3%	ICTの利用	32.1%	情報(文献) 検索・収集	25.0%	空き時間の 居場所として	23.8%
4年次生以上 (n=47)	1人での学習	76.6%	図書館資料の 利用	55.3%	ICTの利用	46.8%	情報(文献) 検索・収集	34.0%	空き時間の 居場所として	31.9%

表6 情報(文献)の検索・収集における支援リソースの利用状況(比率順)

区分	1位		2位		3位		4位		5位	
	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率
全体 (n=244)	関係資料 (インターネット上)	69.7%	友人・知人(学内)	45.1%	関係資料 (インターネット外)	37.7%	教員 (授業担当者等)	28.3%	職員(図書館内)	10.2%
1年次生 (n=59)	関係資料 (インターネット上)	74.6%	友人・知人(学内)	39.0%	友人・知人(学内)	37.3%	教員 (授業担当者等)	15.3%	何もなかった	5.1%
2年次生 (n=62)	関係資料 (インターネット上)	79.0%	友人・知人(学内)	45.2%	関係資料 (インターネット外)	43.5%	教員 (授業担当者等)	19.4%	職員(図書館内)	6.5%
3年次生 (n=74)	関係資料 (インターネット上)	54.1%	友人・知人(学内)	52.7%	教員 (授業担当者等)	33.8%	関係資料 (インターネット外)	29.7%	職員(図書館内)	13.5%
4年次生以上 (n=49)	関係資料 (インターネット上)	75.5%	教員 (授業担当者等)	46.9%	友人・知人(学内)	42.9%	関係資料 (インターネット外)	40.8%	職員(図書館内)	18.4%

表7 個人のPC・プリンター使用における支援リソースの利用状況(比率順)

区分	1位		2位		3位		4位		5位	
	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率
全体 (n=244)	友人・知人(学内)	33.6%	関係資料 (インターネット上)	20.1%	職員(図書館内)	15.2%	職員(図書館外)	7.4%	教員 (授業担当者等)	7.0%
1年次生 (n=59)	友人・知人(学内)	25.4%	関係資料 (インターネット上)	23.7%	職員(図書館内)	11.9%	職員(図書館外)	10.2%	友人・知人(学外)	6.8%
2年次生 (n=62)	友人・知人(学内)	40.3%	関係資料 (インターネット上)	22.6%	職員(図書館内)	9.7%	関係資料 (授業担当者等) 職員(図書館外)	6.5%	何もなかった	4.8%
3年次生 (n=74)	友人・知人(学内)	33.8%	職員(図書館内)	10.6%	関係資料 (インターネット上)	9.5%	教員 (授業担当者等)	8.1%	何もなかった	5.4%
4年次生以上 (n=49)	友人・知人(学内)	34.7%	職員(図書館内)	32.7%	関係資料 (インターネット上)	28.6%	教員 (授業担当者等)	14.3%	職員(図書館外)	12.2%

表8 授業内容の理解における支援リソースの利用状況(比率順)

区分	1位		2位		3位		4位		5位	
	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率
全体 (n=244)	友人・知人(学内)	56.6%	関係資料 (インターネット上)	43.9%	教員 (授業担当者等)	35.7%	関係資料 (インターネット外)	25.8%	何もなかった	4.1%
1年次生 (n=59)	友人・知人(学内)	52.5%	関係資料 (インターネット上)	45.8%	教員 (授業担当者等)	28.8%	関係資料 (インターネット外)	22.0%	友人・知人(学外)	6.8%
2年次生 (n=62)	友人・知人(学内)	62.9%	関係資料 (インターネット上)	46.8%	教員 (授業担当者等)	32.3%	関係資料 (インターネット外)	29.0%	何もなかった	8.1%
3年次生 (n=74)	友人・知人(学内)	52.7%	教員 (授業担当者等)	40.5%	関係資料 (インターネット上)	33.6%	関係資料 (インターネット外)	21.6%	職員(図書館内)	4.1%
4年次生以上 (n=49)	友人・知人(学内)	59.2%	関係資料 (インターネット上)	53.1%	教員 (授業担当者等)	40.8%	関係資料 (インターネット外)	32.7%	職員(図書館内)	6.1%

表9 授業課題における支援リソースの利用状況(比率順)

区分	1位		2位		3位		4位		5位	
	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率
全体 (n=244)	友人・知人(学内)	58.2%	関係資料 (インターネット上)	41.8%	教員 (授業担当者等)	26.6%	関係資料 (インターネット外)	20.5%	友人・知人(学外)	2.9%
1年次生 (n=59)	友人・知人(学内)	57.6%	関係資料 (インターネット上)	45.8%	関係資料 (インターネット外)	22.0%	教員 (授業担当者等)	16.9%	友人・知人(学外)	5.1%
2年次生 (n=62)	友人・知人(学内)	58.1%	関係資料 (インターネット上)	43.5%	教員 (授業担当者等)	24.2%	関係資料 (インターネット外)	21.0%	家族・親類	4.8%
3年次生 (n=74)	友人・知人(学内)	54.1%	関係資料 (インターネット上)	33.8%	教員 (授業担当者等)	25.7%	関係資料 (インターネット外)	12.2%	職員(図書館内)	4.1%
4年次生以上 (n=49)	友人・知人(学内)	65.3%	関係資料 (インターネット上)	46.9%	教員 (授業担当者等)	42.9%	関係資料 (インターネット外)	30.6%	友人・知人(学外)	4.1%

表10 卒業論文における支援リソースの利用状況(比率順)

区分	1位		2位		3位		4位		5位	
	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率	支援リソース	比率
4年次生以上 (n=49)	教員 (授業担当者等)	83.7%	関係資料 (インターネット上)	73.5%	友人・知人(学内)	65.3%	関係資料 (インターネット外)	53.1%	職員(図書館内) 友人・知人(学外)	4.1%